

神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
120

【神秘学ポエジー～風遊戯 第240集】 photo ヴァージョン

photopos 2976-3000

《2022.11.1～2022.11.25》

神秘学遊戯団



誇りが
汚されないようにと
鎧でみずからを覆うとき
自由は損なわれる

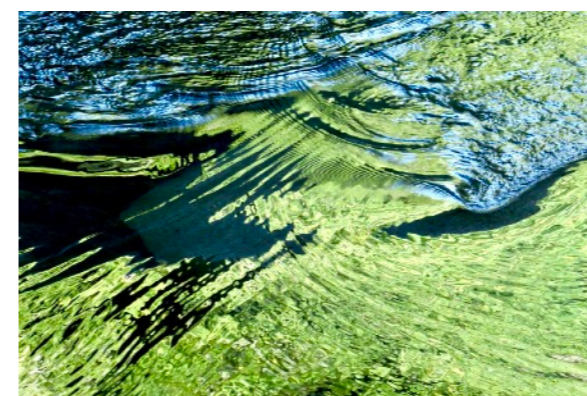
真の誇りは決して
傷つけられることのない
自由の翼だ

論理が
論破されないようにと
武装し争うとき
思考は損なわれる

真の論理は決して
損なわれることのない
思考の翼だ

希望が
損なわれないようにと
期待と空想を広げるとき
未来は損なわれる

真の希望は決して
失われることのない
未来への翼だ





白か
黒か
どちらなのだ
そう言われても

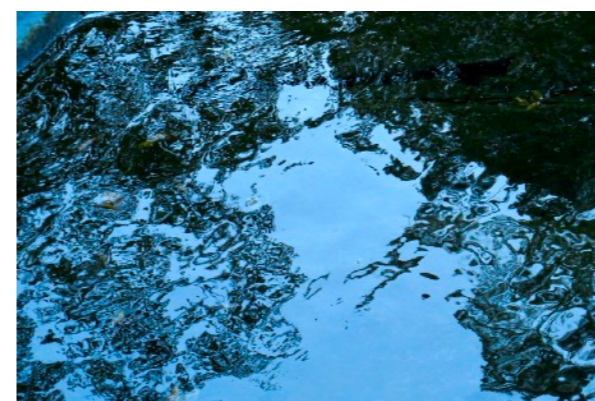
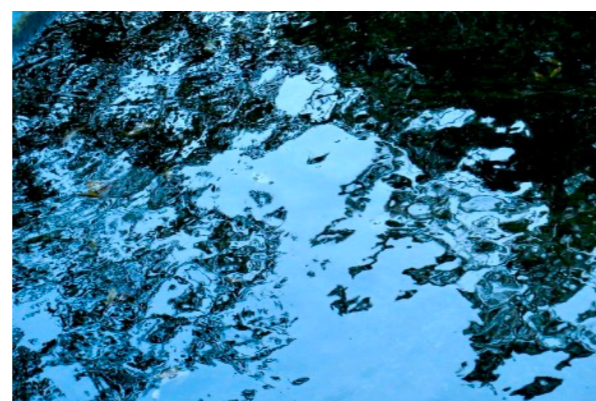
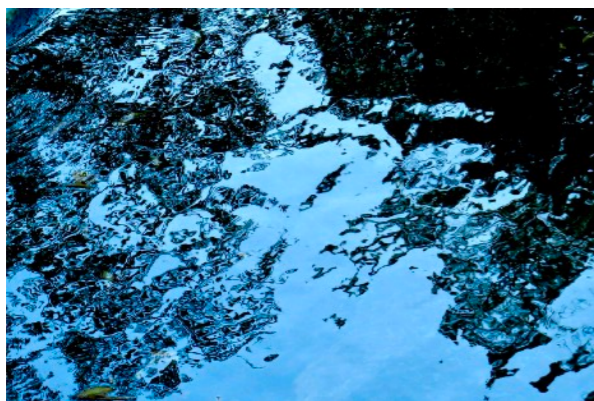
どちらでもあり
どちらでもない
それが生きるということじゃないか

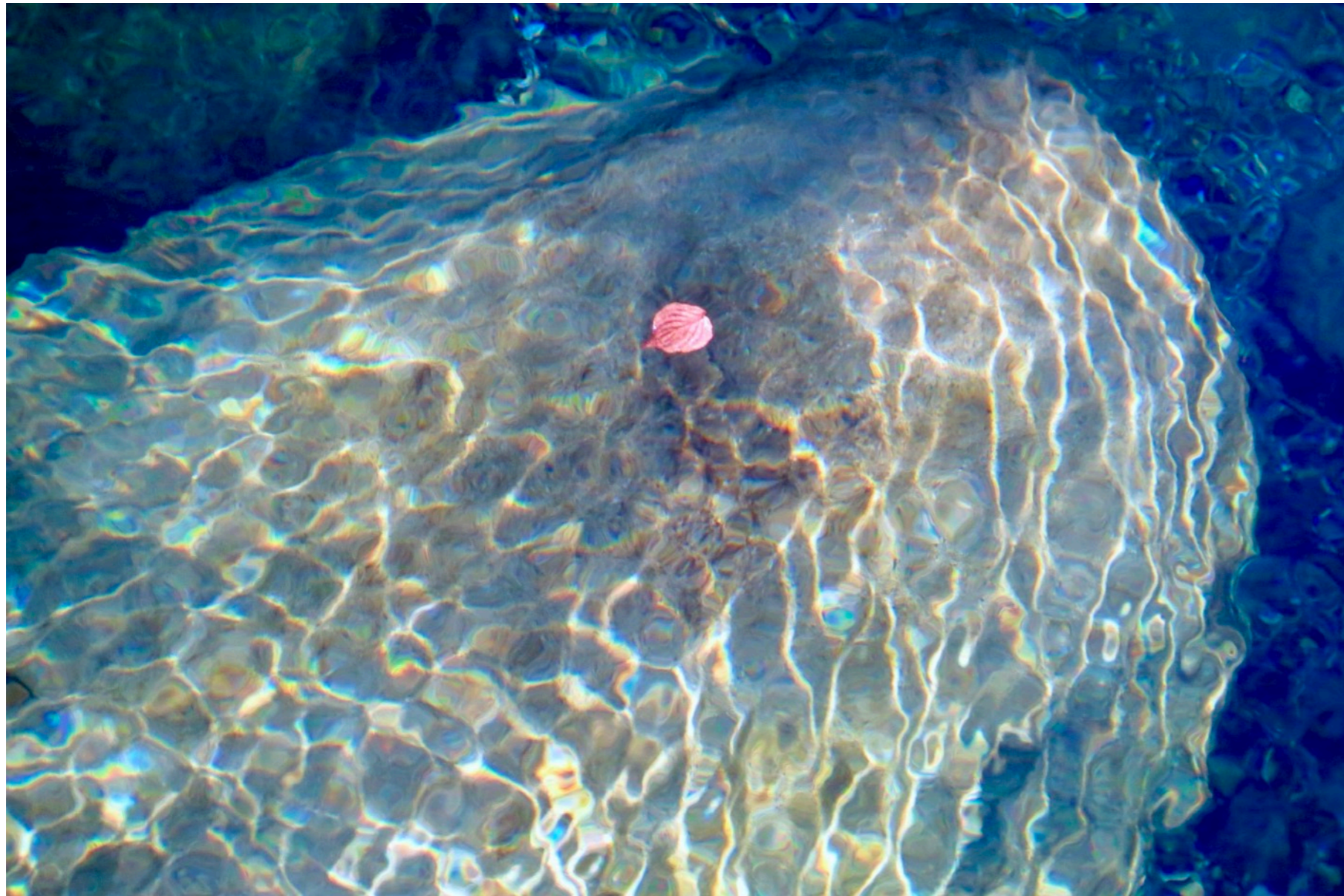
生か
死か
それが問題だ
そう言われても

生まれてくれば
死ぬことになっているし
死ぬためには
生まれてこなければならぬ
それが生きるということじゃないか

偶然か
必然か
どうなのだ
そう言われても

すべては偶然でありながら
それでいて必然だ
それが生きるということじゃないか





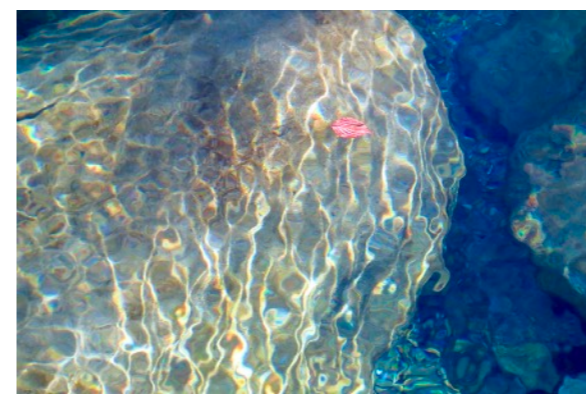
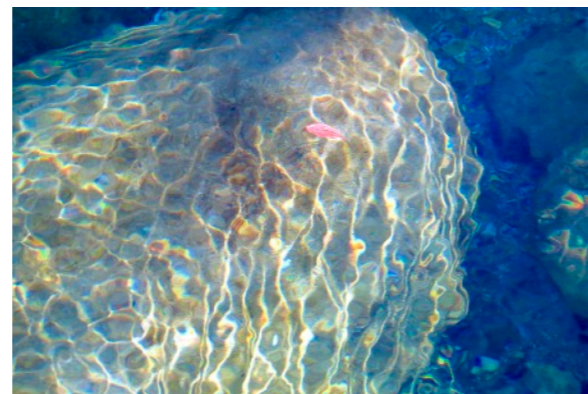
昨日のわたしが
今日のわたしを知らないように
今日のわたしは
明日のわたしを知らずにいる

明日のわたしは
どこにもいない
それでも
わたしは知りたがる

教える者は
後を絶たないけれど
だれがほんとうに
明日のわたしを知るだろう

だれも知らない
明日のわたし
どこにもいない
明日のわたし

わたしは
なんになれるだろう
いまはまだ
だれでもない
明日のわたし
なんにでもなれる
明日のわたし





わたしが
見ている光を
見ている者がいる

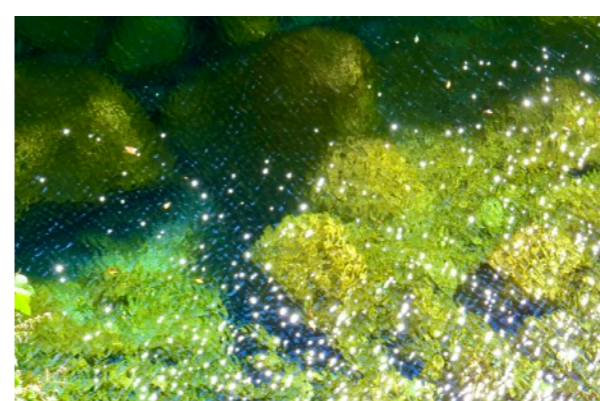
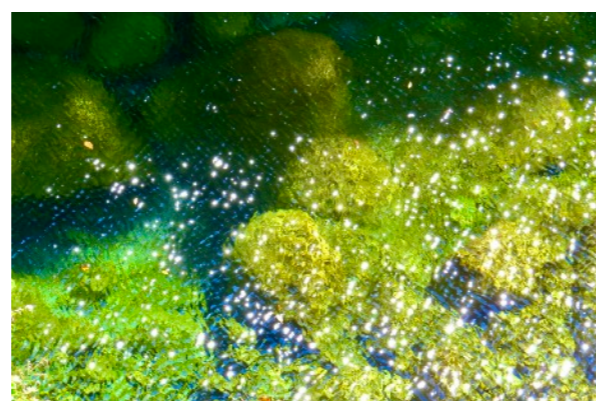
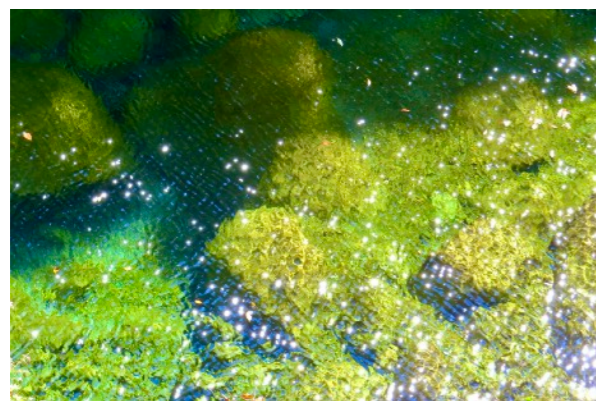
わたしの眼で
見ている者がいる

わたしが
すべてを忘れることで
わたしになったとき

わたしは
じぶんが見ていると思い
わたしの眼で
見ている者のことも忘れてしまった

わたしは
ひとつの鏡である
すべてを忘れて
わたしとなった鏡である

鏡が曇り
割れてしまうとき
わたしの眼で
見ている者もまた
歪んだ光を見ることになる



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



なにが
世界を変えるのか

世界のなにが
変わるのか

世界は
変わらずにはいられない
世界はなかなか忙しいのだ

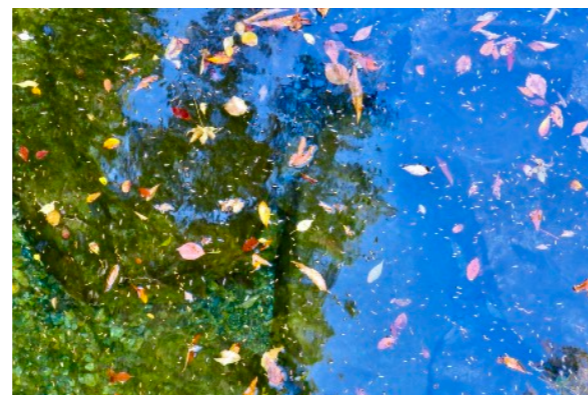
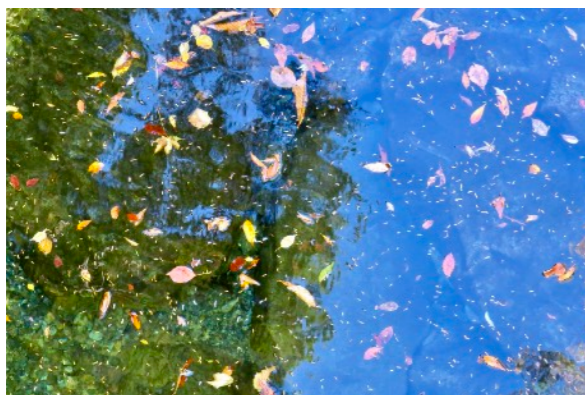
けれどときには
静かな眠りの時を

なにが
わたしを変えるのか

わたしのなにが
変わるのか

わたしは
変わらずにはいられない
わたしはなかなか忙しいのだ

けれどときには
静かな眠りの時を





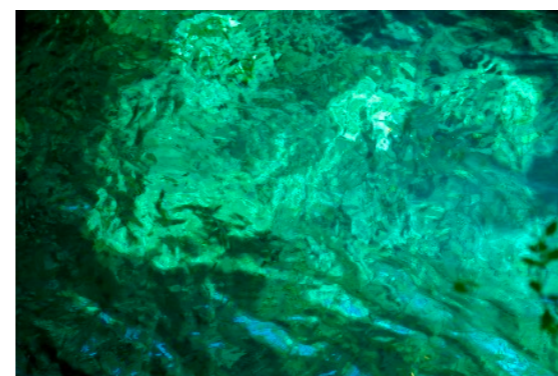
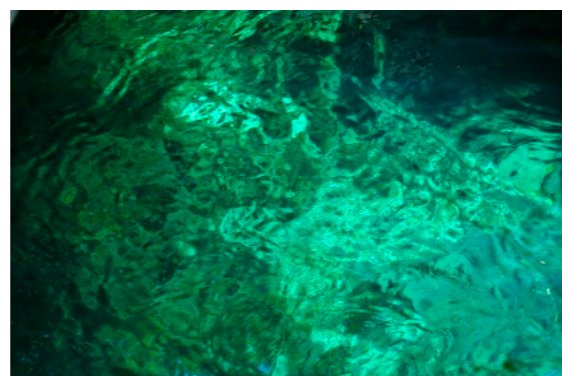
己を
鎮めるために
己を見る

己の姿を
己の心を見据える

怒りで
悲しみで
荒ぶり狂う
魔物となっていないか

それでも
己を見るに
耐えないときは
己が映された者の姿を
そして心を見据える

魔物の咆哮し
狂乱し疾駆する姿を
己に映し出すのだ





うたを忘れた
たましいは
闇の小舟に
乗せましょか

いえいえ
それはなりませぬ

光の小舟に
乗せるなら
忘れたうたを
思い出す

みちを忘れた
たましいは

夢の迷路に
捨てましょか

いえいえ
それはかわいそう

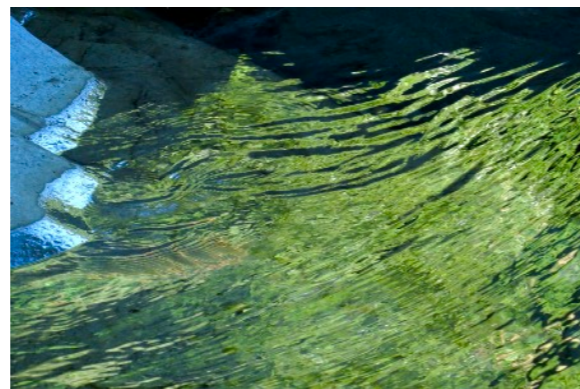
夢の秘密を
教えれば
忘れたみちを
思い出す

じぶんを忘れた
たましいは

自由の翼を
なくしましょ

いえいえ
それはおそろしい

記憶の奥へと
旅するならば
忘れたじぶんを
思い出す



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



わたしは
ここにいるのだろうか

こことは
どこだろう

わたしとは
だれだろう

ときおり
ふいに
わからなくなる

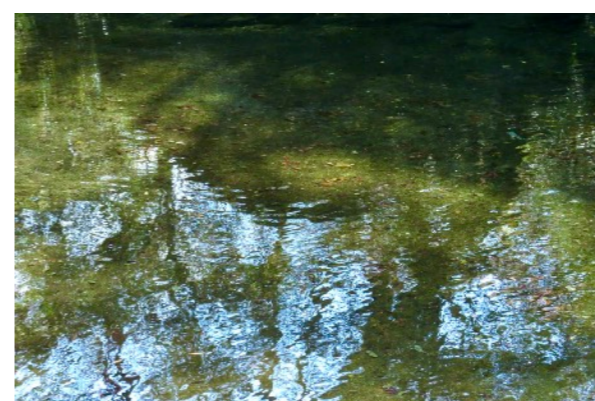
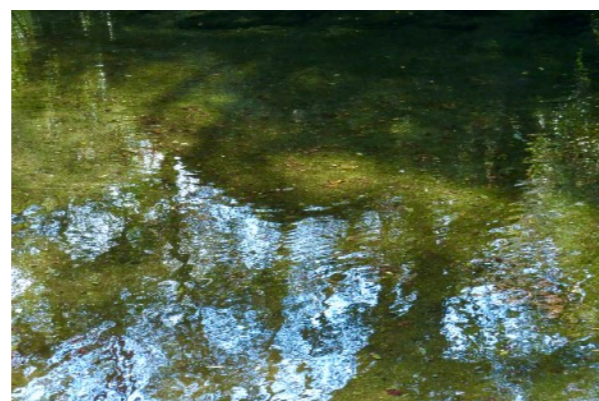
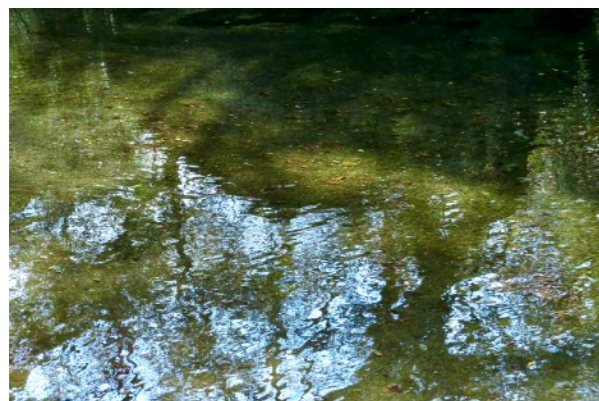
夢から醒めたばかりの
どこにもいないわたしのように

記憶がこぼれ落ち続け
どこにも居場所のなくなる者のように

ここ
というたしかな場所が
見つからない

わたし
というたしかなじぶんが
見つからない

わたしは
ここにいるのだろうか





わたしの思い
わたしの言葉

それらひとつひとつは
決して消えることはない

知らないうちに
集まり
重なり
連なりあい
増殖しながら
ひとつの生きものとなって
動きはじめる

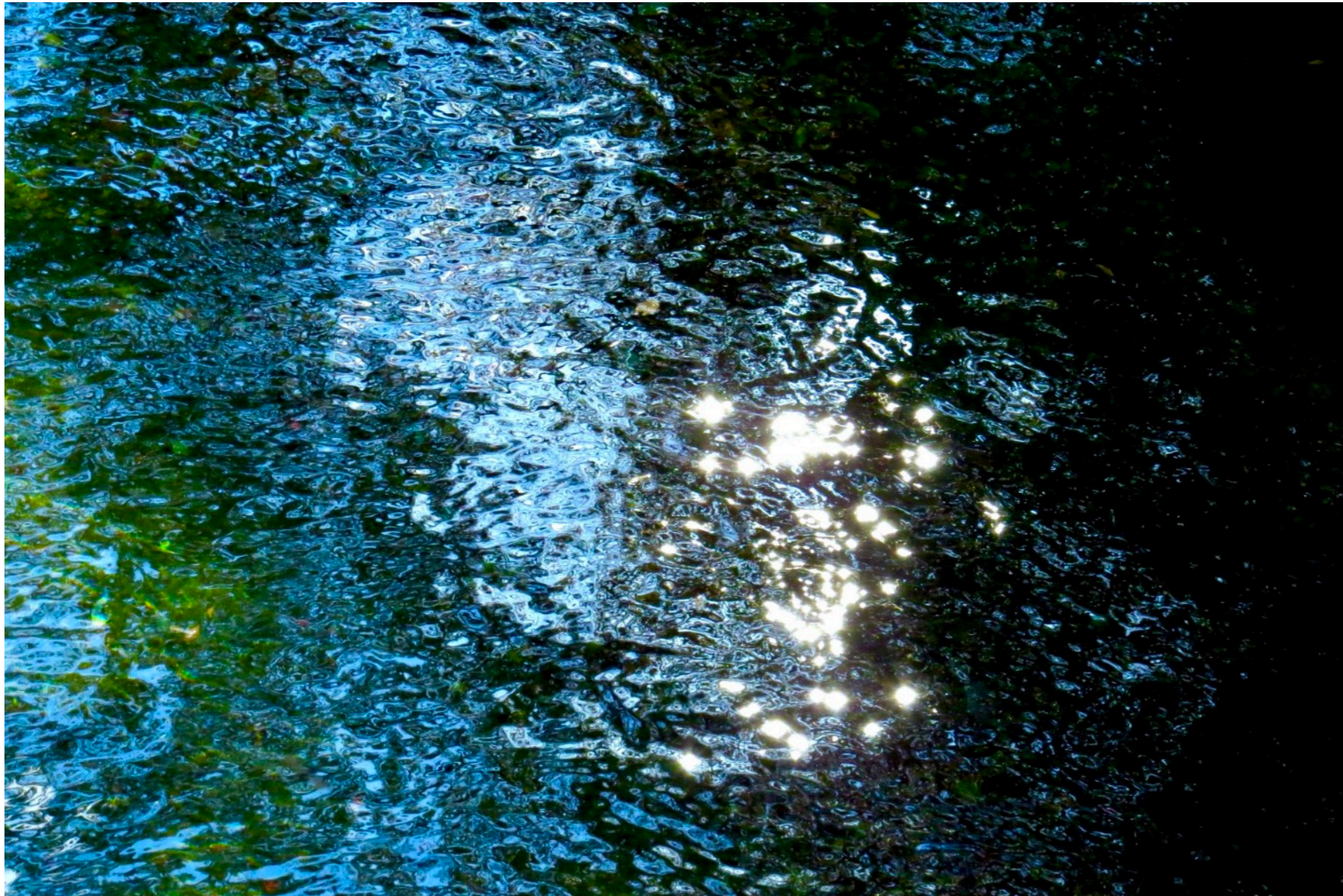
そしてそれはやがて
わたしのまえに
その姿をあらわすことになる

その生きものが
どんな姿をしているとしても

それをじぶんだと思える者は幸い
である
わたしの思いと言葉は
わたしを光へと導くだろう

それをじぶんだとは認めない者は
災いである
わたしの思いと言葉は
わたしを闇へと引き渡すだろう





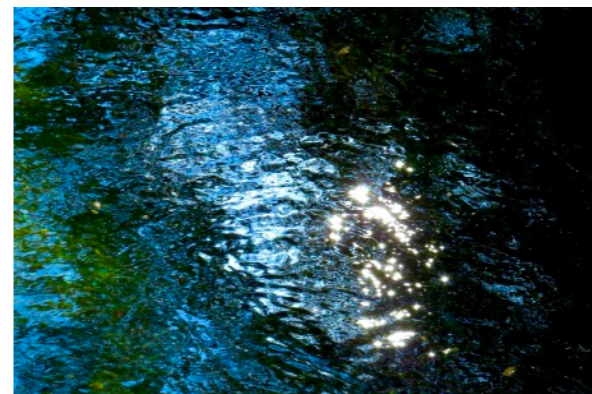
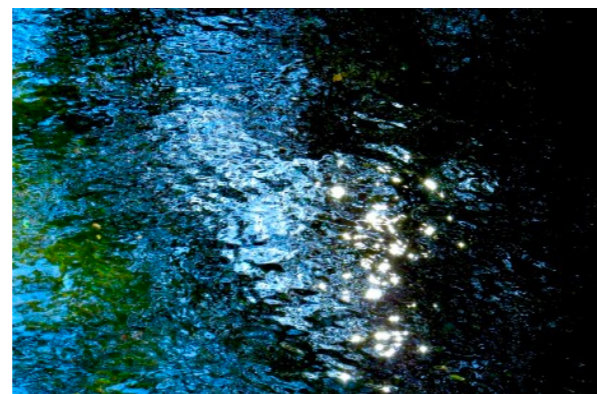
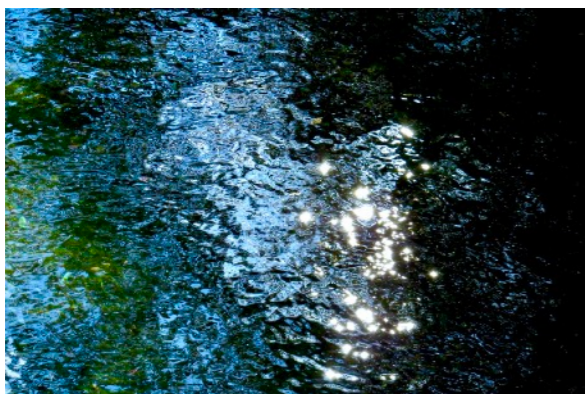
わからなくていい
驚くのがいい
言葉にならなくていい

わかるとつまらなくなる
驚けないとつまらなくなる
言葉になるとつまらなくなる

すぐにわからないのがいい
すぐに慣れっこにならないのがいい
すぐに言葉にならないのがいい

わからないことだらけ
驚くことだらけ
言葉にならないことだらけ

自然は自然という問いなのだから
心は心であるという問いなのだから
人は人であるという問いなのだから





見えないけれど
たしかにあるもの

それに気づくために
あらゆる感覚を研ぎ澄まし

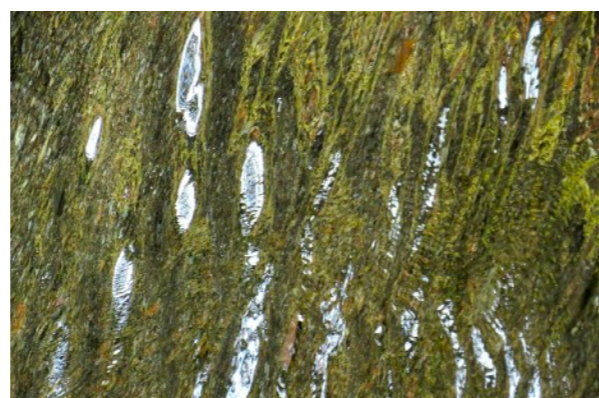
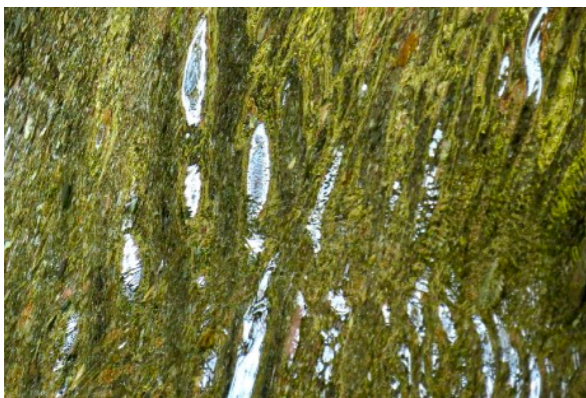
その気配を
痕跡を探す

大地に
天空に

あなたの心
わたしの心に

そんな
見えないけれど
たしかにあるものに気づき
その謎を追いつづけるとき

わたしと世界は
その見えない姿を変容させ
あらたなかたちでむすばれてゆく





ふつう
は
ほんとうは
どこにもない

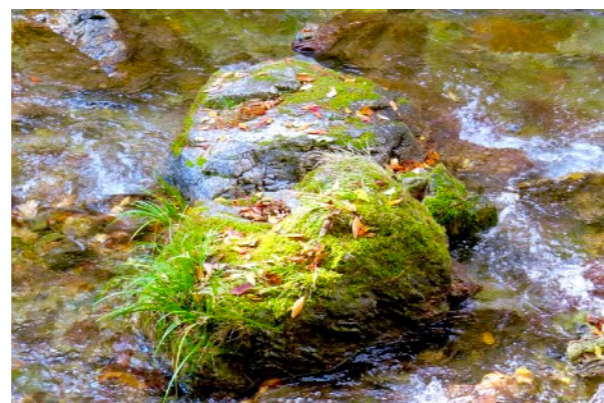
どこにもない
ふつうは
どこからきたのだろう

ふつうは
ひとをふじゆうにするのに

あたりまえ
は
ほんとうは
どこにもない

どこにもない
あたりまえは
どこからきたのだろう

あたりまえは
ひとをつまらなくするのに



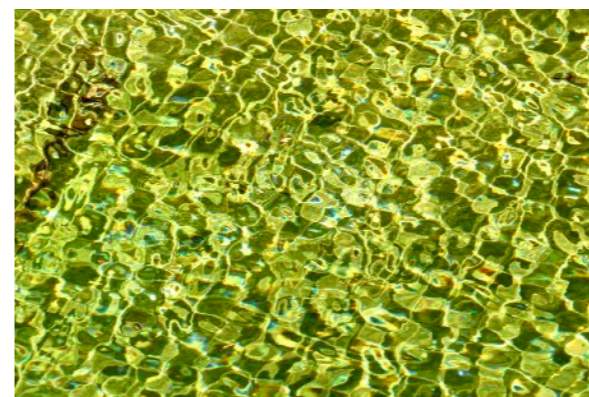
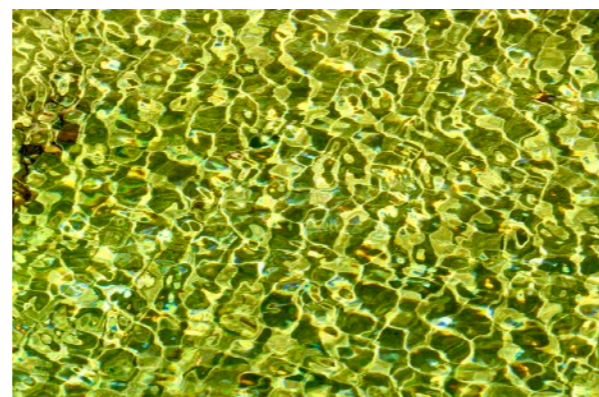
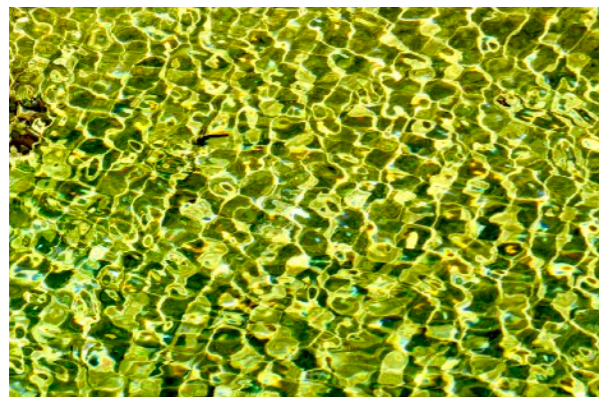
※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



科学者は嘘つきだ
数学なども駆使し
客観を嘯きながら
世界を細切れにしてしまう

哲学者は嘘つきだ
言葉巧みに
真理を語ろうとするのだが
その頭の賢さは
魂を冷たくしてしまう

詩人も嘘つきだけれど
嘘つきであることを隠しはしない
むしろ嘘つきであることを誇るのだ
嘘を嘘のまま
嘘だからこそ
ひとの胸を熱くさせる





ほんとうの姿は
どんな姿をしているのだろう

かたちは
いつも変わっていくから

ほんとうの姿は
いつまでも見えないままで

ほんとうの数は
どこにあるのだろう

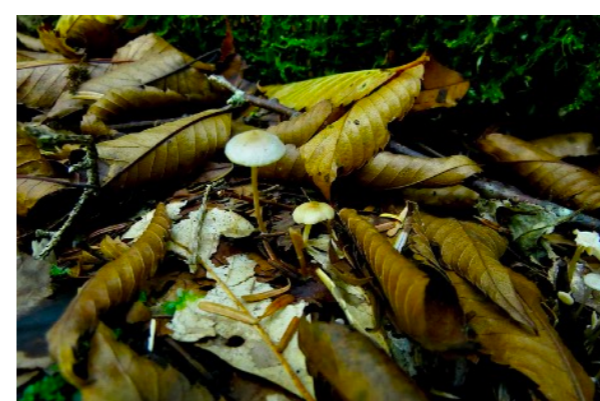
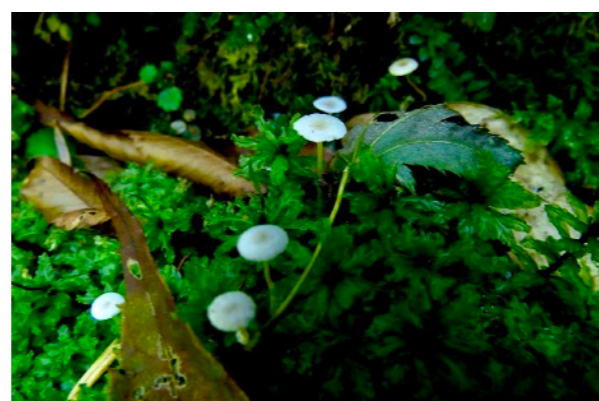
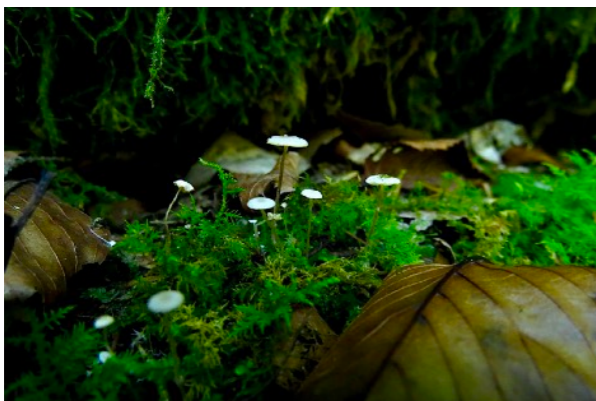
数えても
数えても
数にならない数があるから

ほんとうの数は
いつまでも数えられないままで

ほんとうの心は
どんな心なのだろう

わたしの心は
いつもわたしではなくなっているから

ほんとうの心は
いつまでもわからないままで



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



非我と出会う
意識の臨界で

言葉は狂気の坩堝
未知の卵から
孵化しなければならない

詩が詩であるための
言葉の通過儀礼である

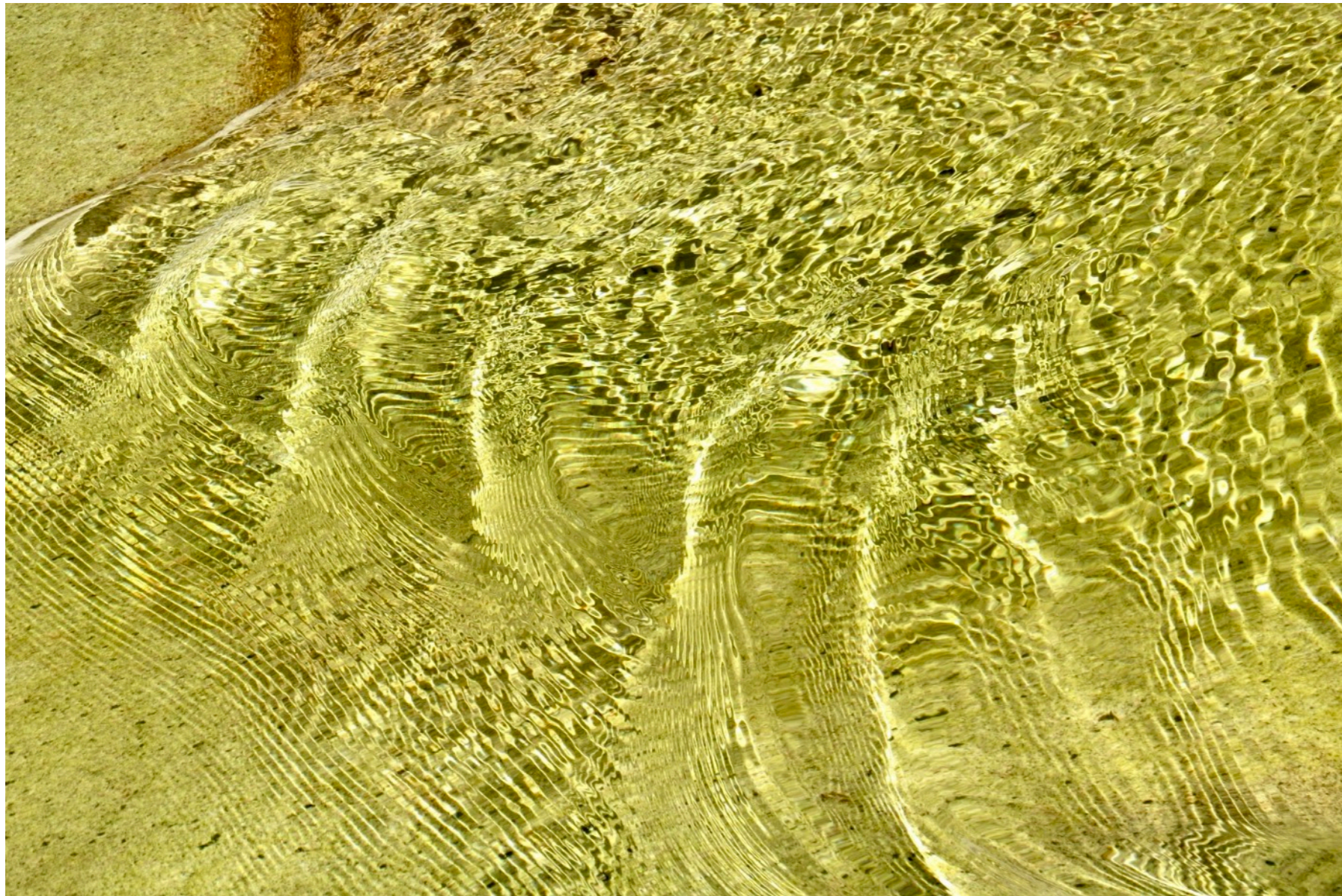
死を経て再生した言葉は
すでにかつての言葉ではない
私もすでにかつての私ではない

私は表現しない
表現するのは
変容した言葉なのだ

未知の卵を孵化させ
そして生まれ来たるものと
ともに詠わねばならない

意識の臨界で





飼いならされ
翼をなくしたとき
鳥は鳥ではなくなっている

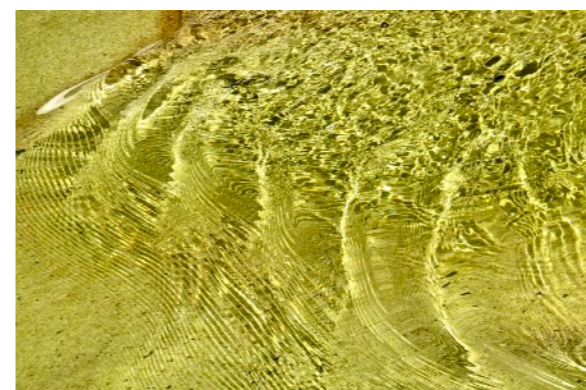
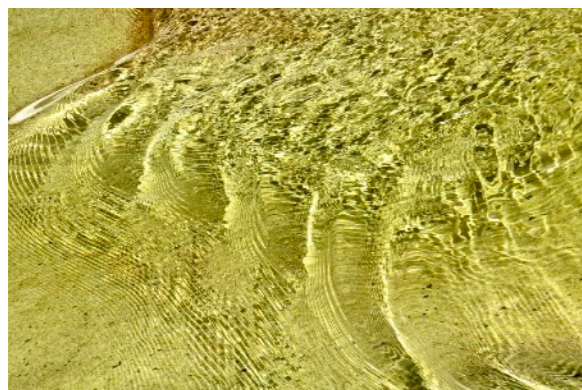
空はもう
空ではない
風はもう
風ではない

大地を超え
飛翔することなど
想像することさえできない

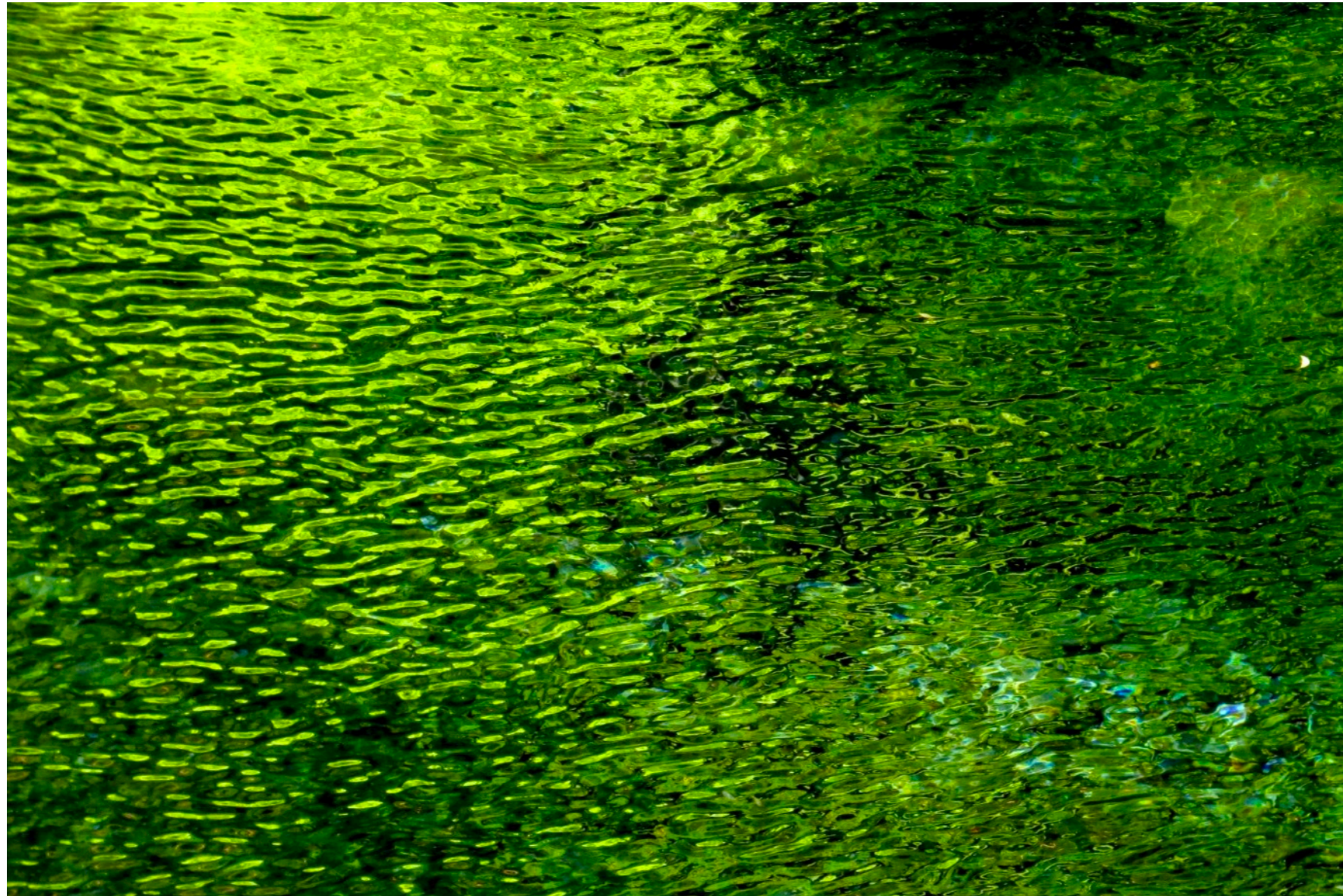
飼いならされ
問いをなくしたとき
人はもう人ではなくなっている

水はもう
瑞ではない
火はもう
霊ではない

神秘を求め
魂を飛翔させることなど
夢みることさえできない



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



ちゃんと
考えるのはむずかしい

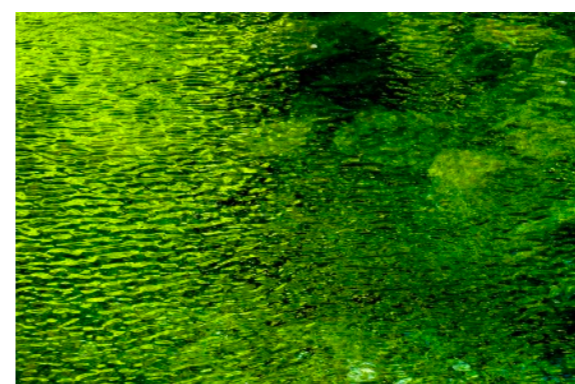
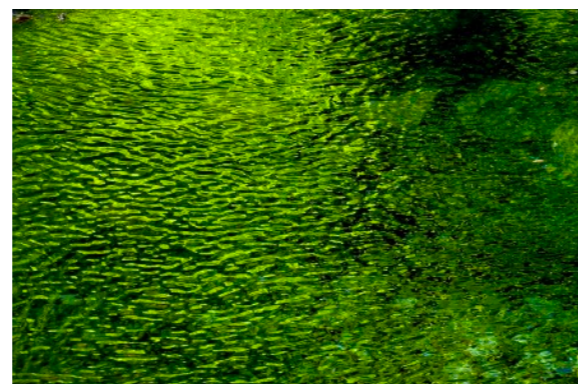
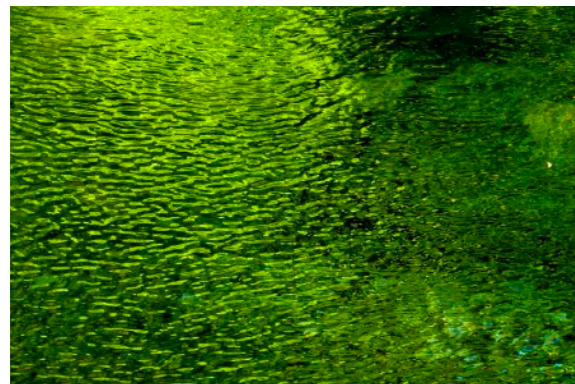
ちゃんとするには
近く遠く
狭く広く
浅く深く
考えなくてはならないからだ

ちゃんと
感じるのはむずかしい

ちゃんとするには
共感と反感から自由に
快と不快から自由に
賛成と反対から自由に
感じなくてはならないからだ

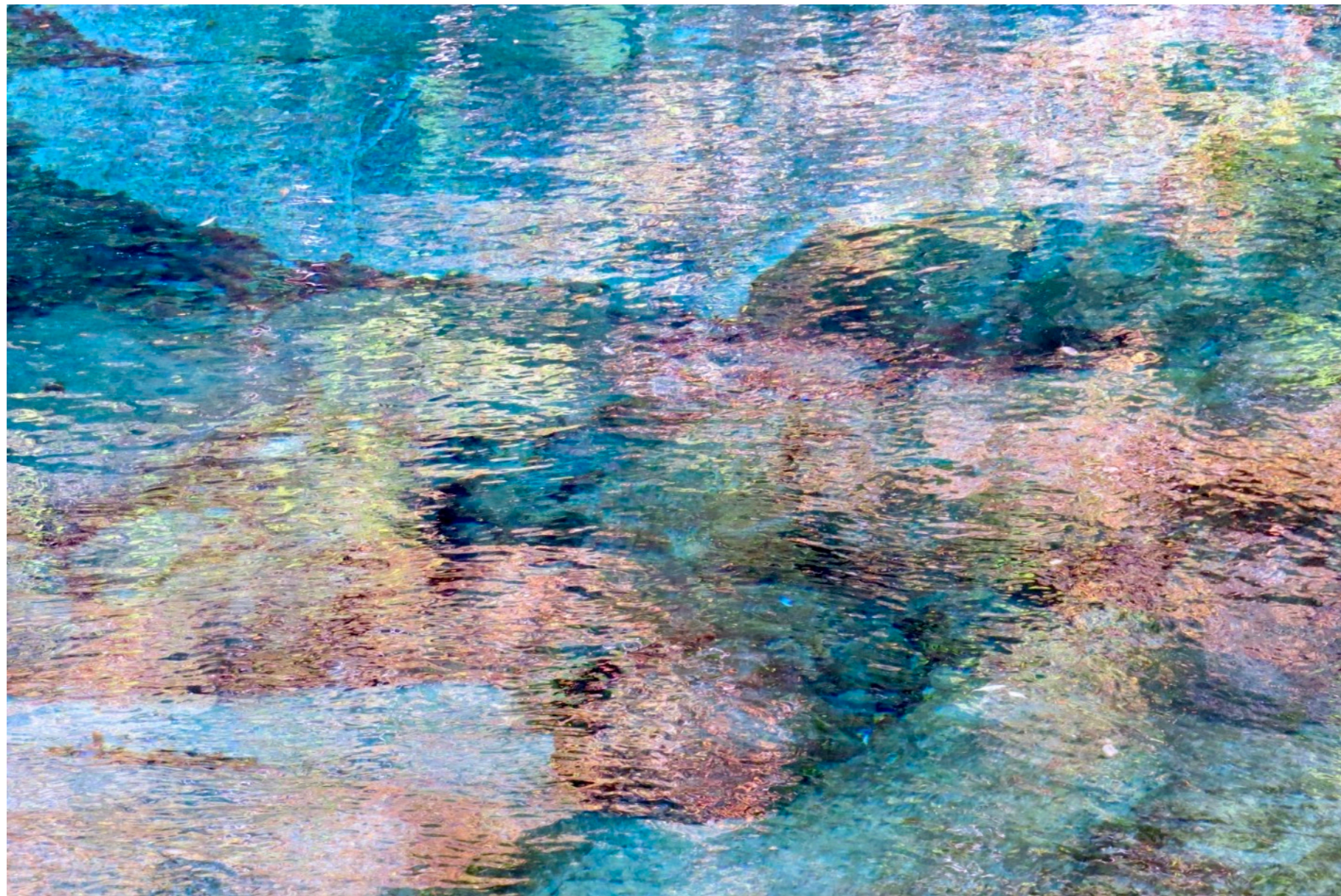
ちゃんと
生きるのはむずかしい

ちゃんとするには
吸って吐いて
食べて出して
目覚めて眠り
そして
生まれて死んでを
調和させなければならぬからだ



☆photopos-2993

2022.11.18



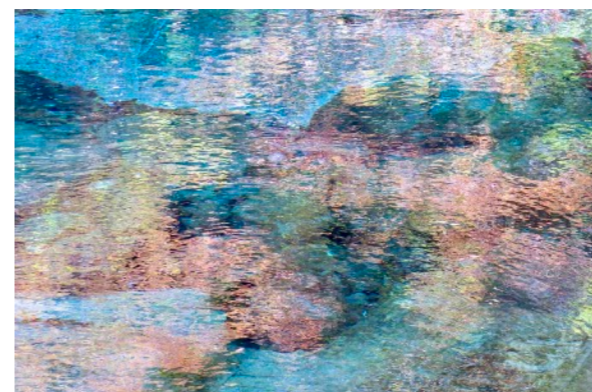
水に映る
我が心は
迷宮の内

夢と現を
たがいに
照らして

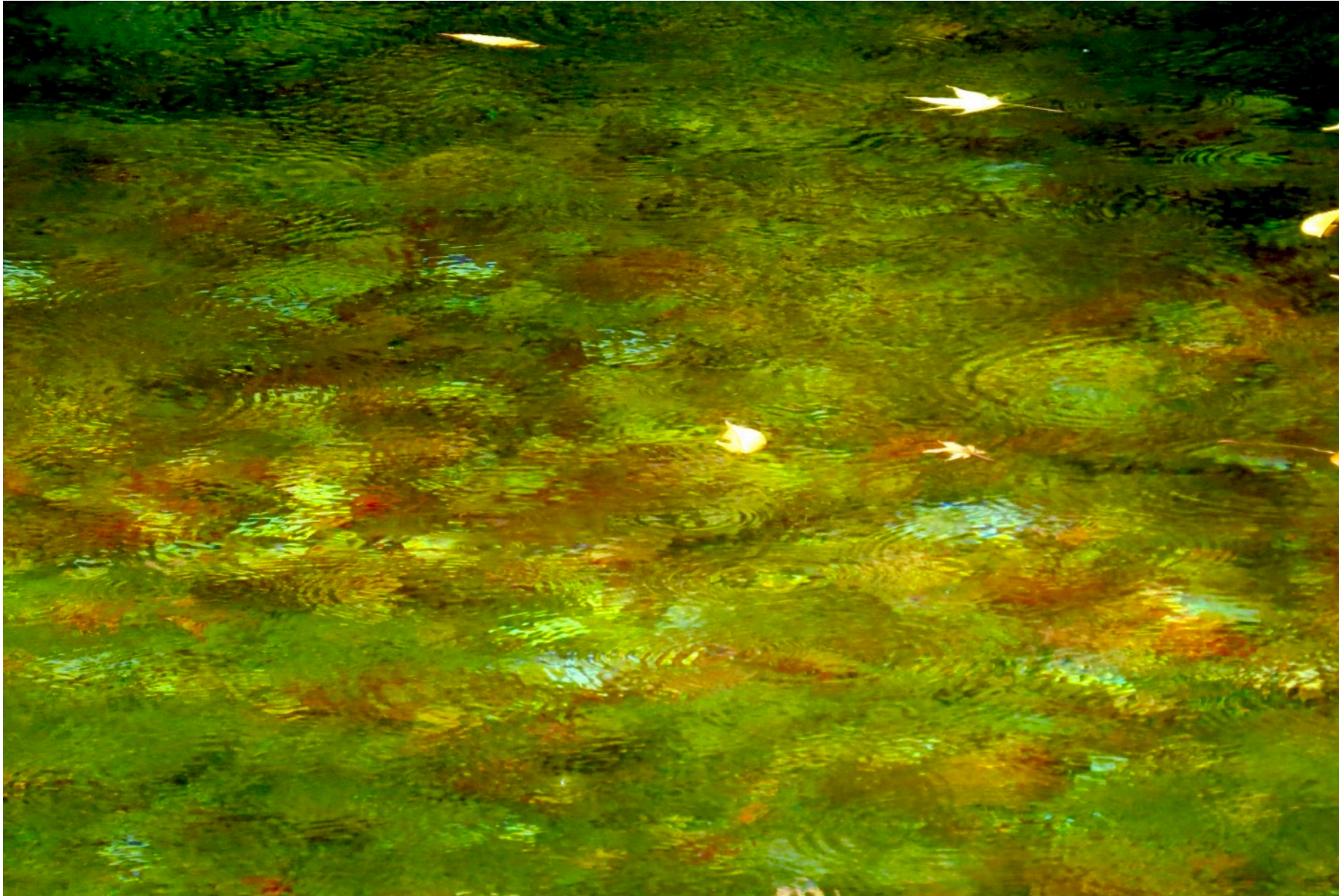
生と死を
めぐりて
時を重ね

聖と俗の
果てにて
響きあう

我が心は
何を求め
彷徨うか



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



わたしは
なぜ
そうなるのか

それには
理由がある

わたしには
外と内があり

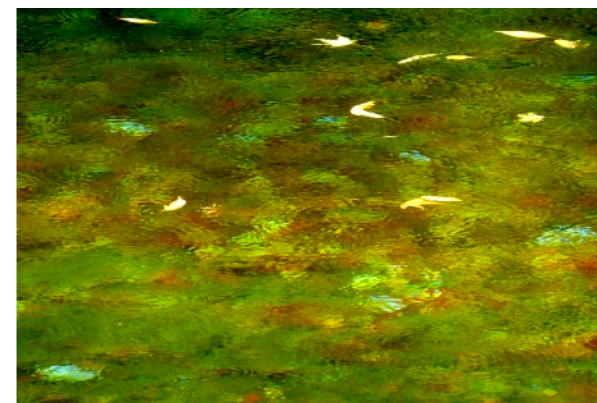
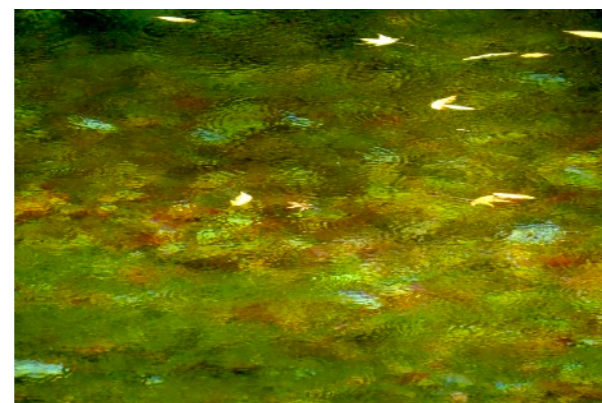
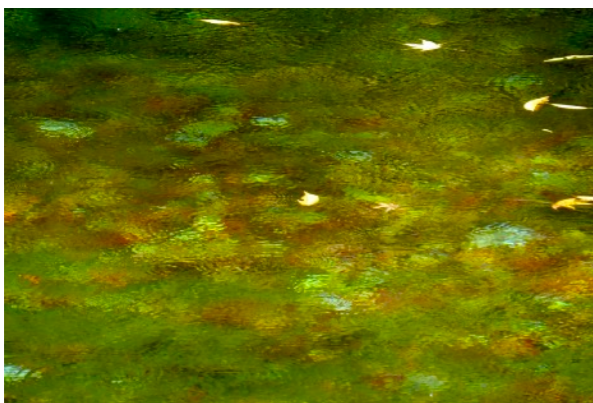
わたしは
その内と外で
ゆれている

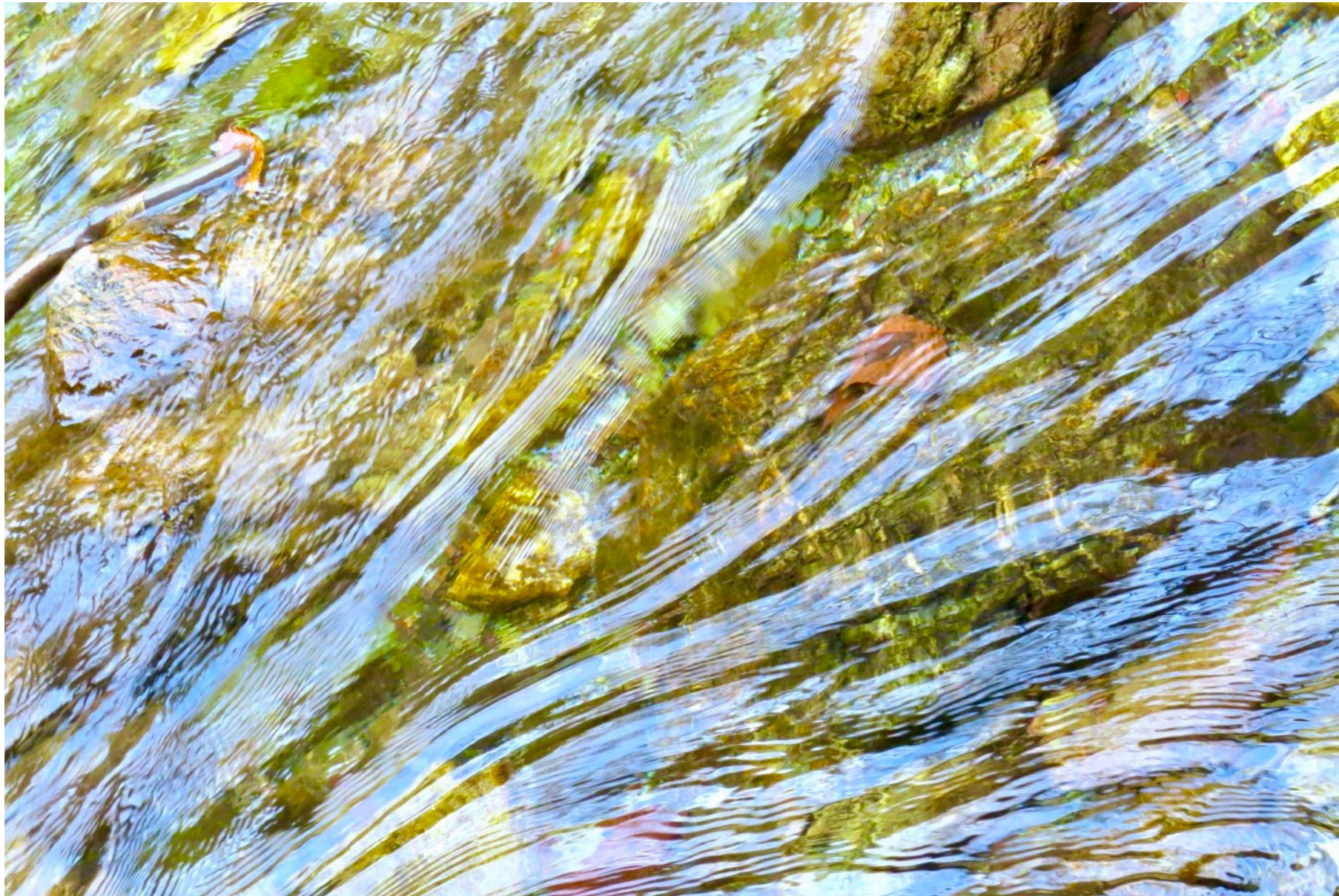
内から外へ
外から内へ
ゆれている

右手と左手が
争うように
右目と左目が
分かれるように

ゆれながら
わたしは
そうなるのだ

自由でもあり
運命でもある
そんな理由で
矛盾を生きて





流されていないか

流されていることに
気づいているか

流されているじぶんを
見ているか

流されてどこへゆくか
知っているか

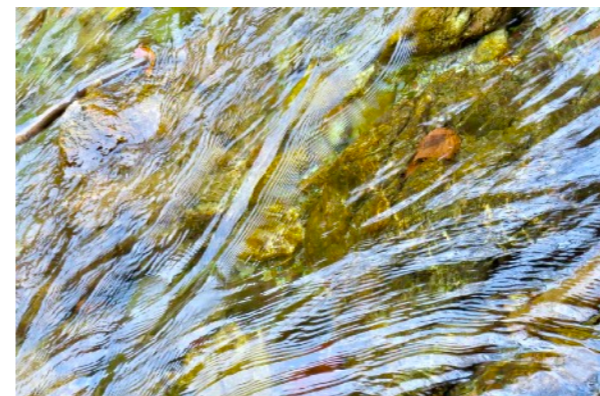
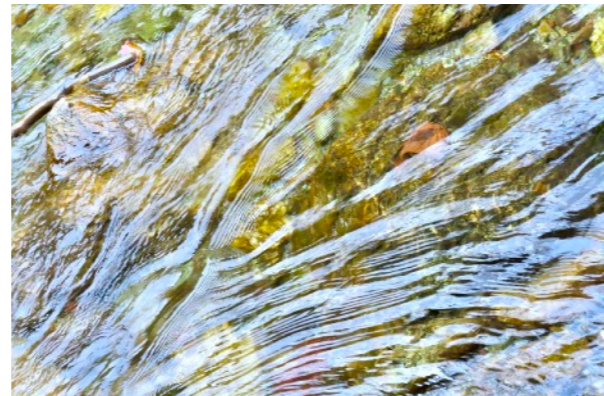
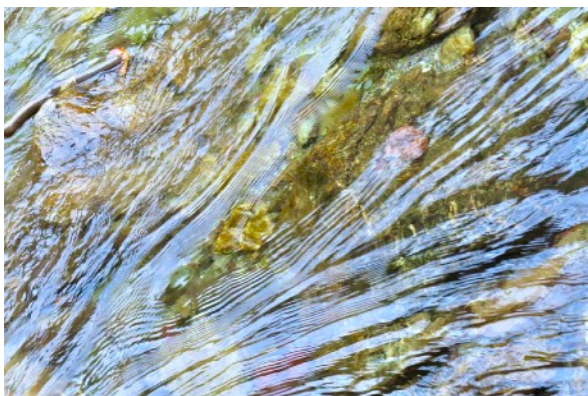
流されていることを
問いなおせているか

あえて流されているのか
否応なく流されているのか

流されないことが
できるだろうか

流されざるをえなくても
そこでできることはあるか

流されていても
流されていなくても
そこに自由はあるか





知ることに
果てはあるのだろうか

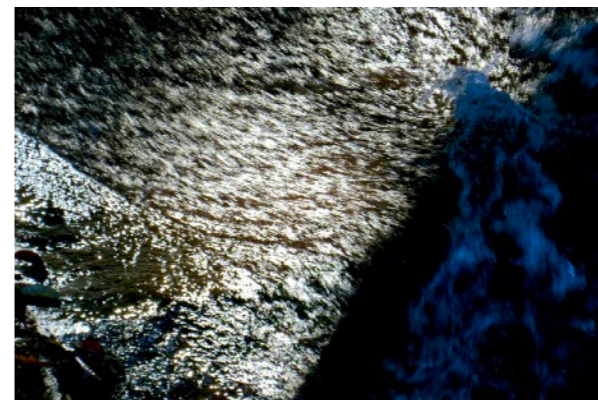
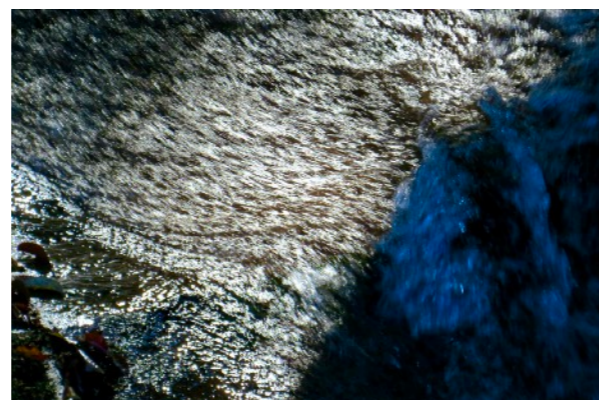
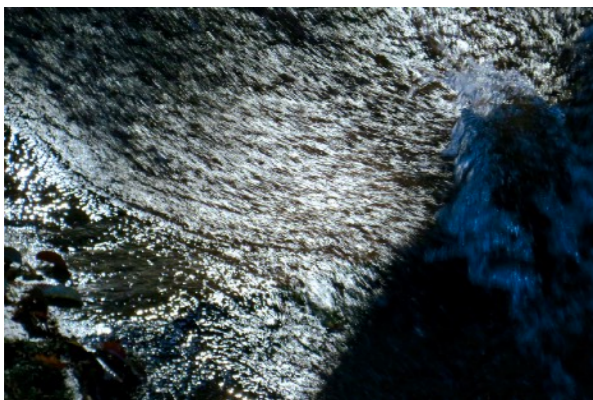
わたしがわたしであることに
果てがないように
知ることに果てはない

ここまで知れば自足できる
ということでもないだろう

果てがないからといって
信じることに
それを代えるわけにもいかない

神はみずからを知るために
宇宙を創ったという物語がある
その物語に知る果てはあるのだろうか

わたしはみずからを知るために
どんな物語を生きればいいのか
果てのないわたしのままで





大地の奥の
轟きで
揺れ動くように

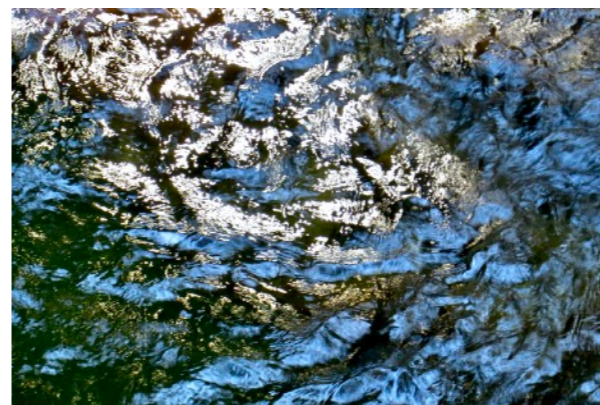
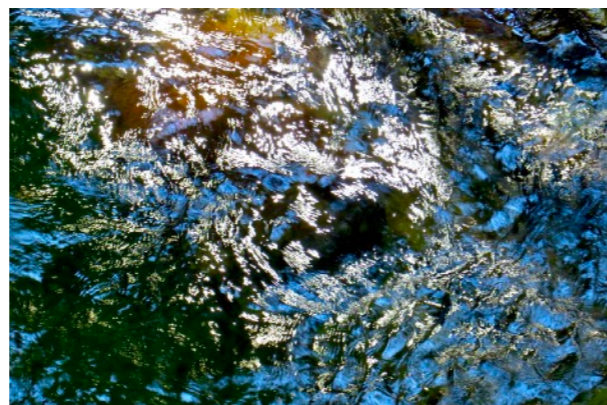
魂の奥の
マグマが
顕れるとき

それは
どんな声となって
響くだろう

天空の彼方から
光が
照らすように

精神の国の
旋律が
奏でられるとき

それは
どんな歌となって
響くだろう



※愛媛県北宇和郡松野町「滑床溪谷」にて



秘密は
秘されることで
その力を得る

古代において
秘儀を漏らす者は
死をもって
償わなければならなかった

現代では
靈性に関わる秘儀は
公開されはじめているものの

政治的な秘密や
利権に関わる秘密を
公にしようとする
死がもたらされることになるらしい

秘密は
秘されることで
その力を得るからだ

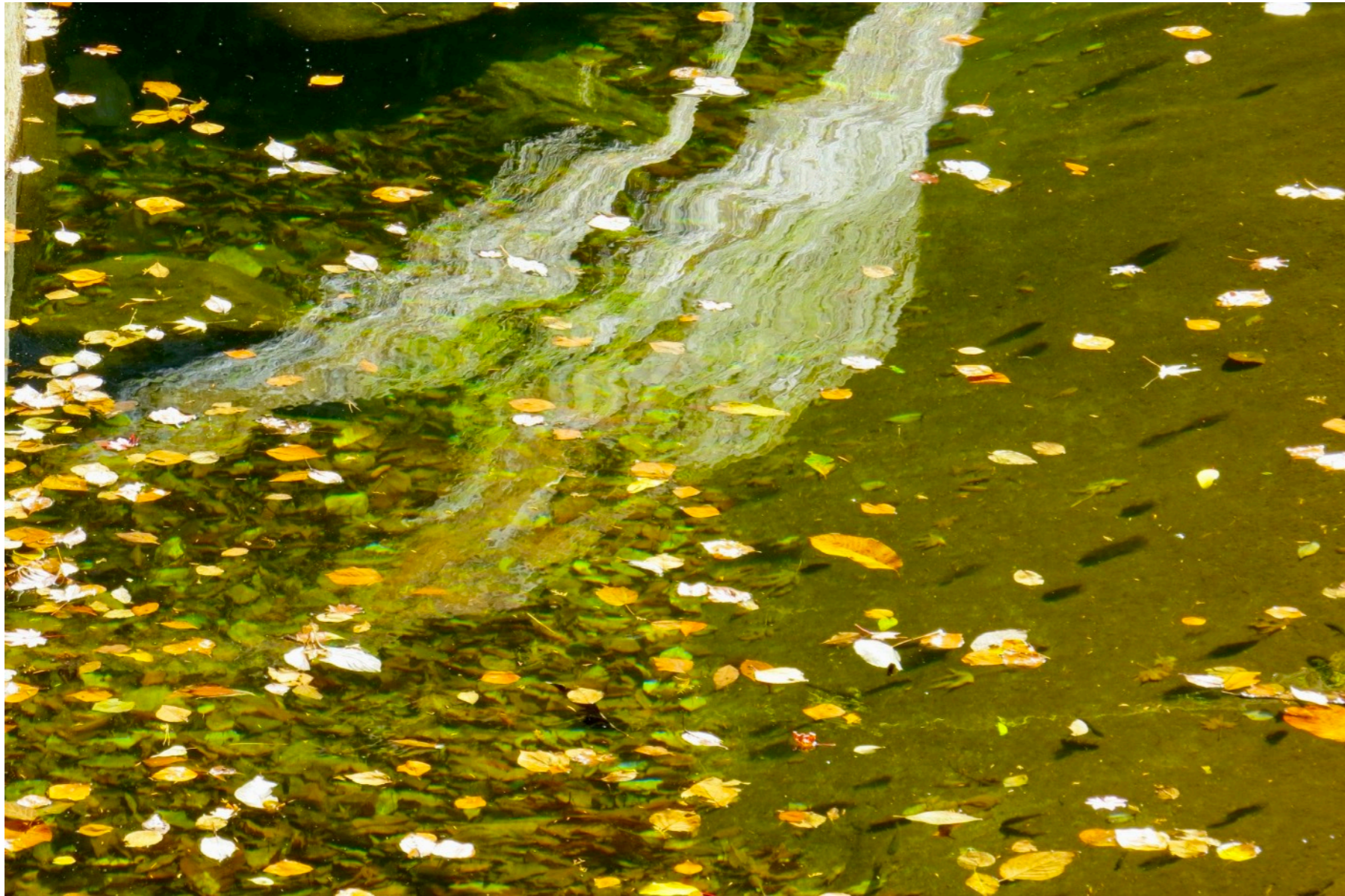
力が世界を覆っている
その秘密は公開されてはならない

秘密を守るためには
組織の命を忠実に実行する
現代のアイヒマンが必要だ

アイヒマンは疑わない
アイヒマンは組織の善意である
アイヒマンは決められたことを守る
アイヒマンは行為をふりかえらない

与えられた力を行使し
秘密を守るばかりだ
やがて破滅の時を迎えるまで





神は
異端をつくったか

異端をつくったのは
人間である
あるいは
人間に憑依した正しさという神

教祖は
宗教をつくったか

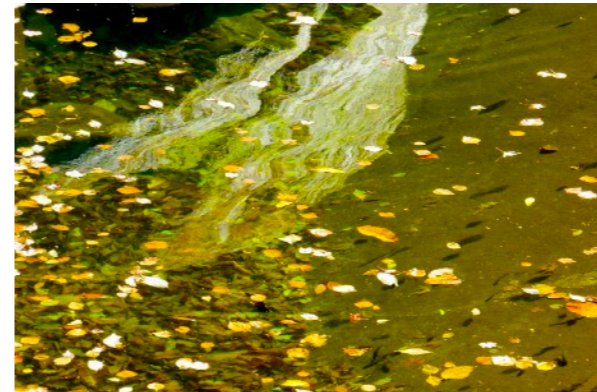
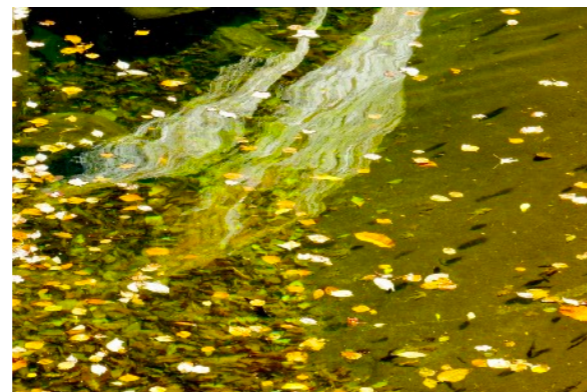
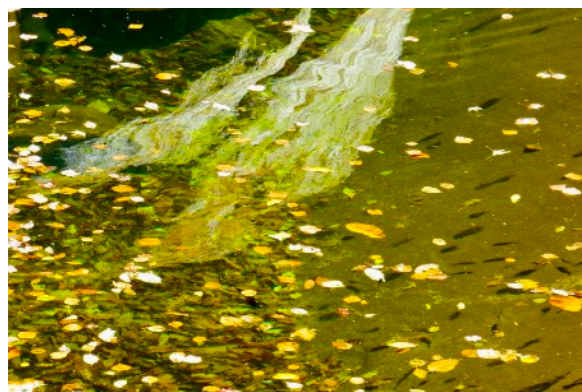
教祖をつくったのは
人間である
あるいは
人間に憑依した救いへの欲望

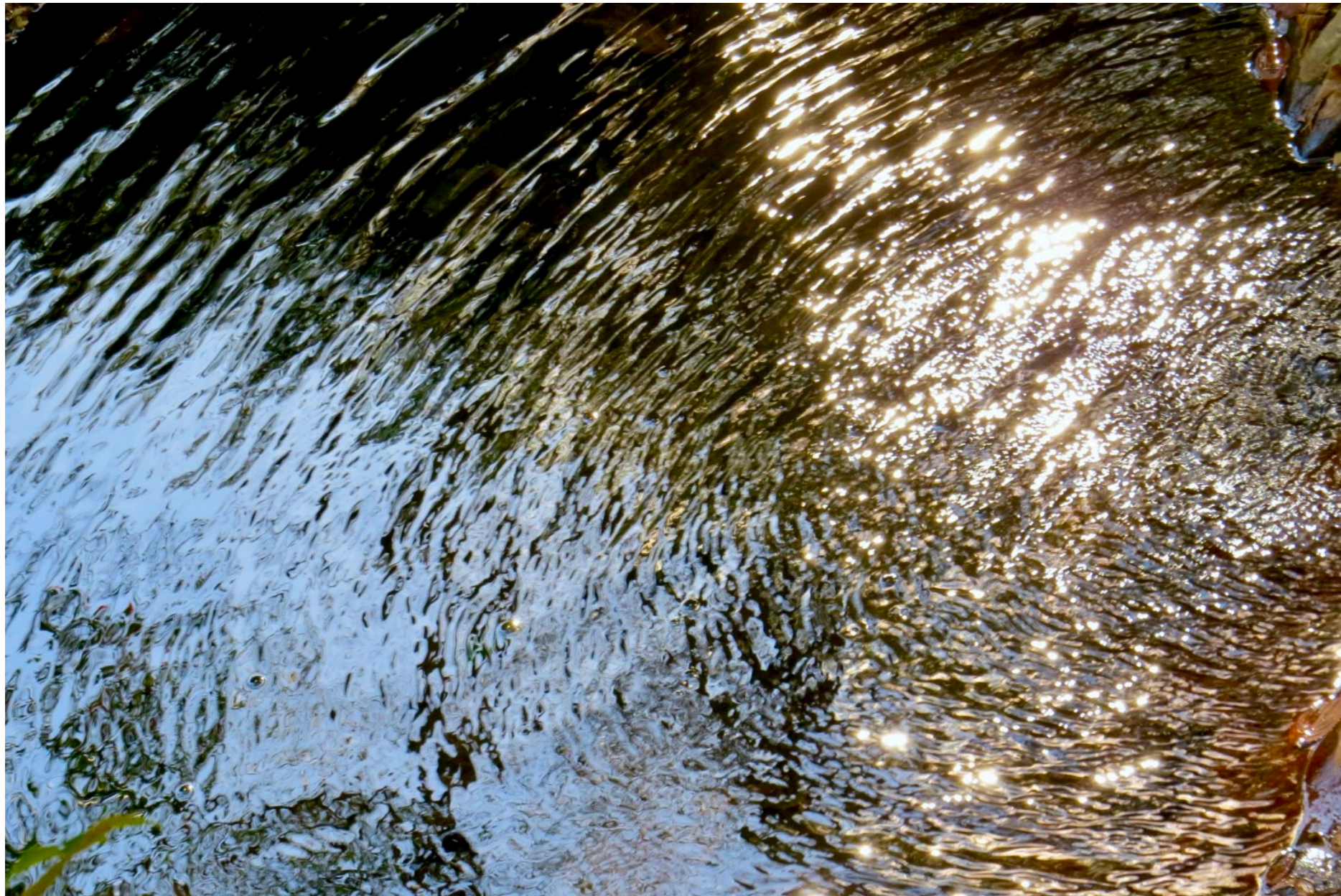
科学は
真理をつくったか

真理をつくったのは
人間である
あるいは
人間に憑依した真理への神話

宇宙は
時間をつくったか

時間をつくったのは
人間である
あるいは
人間に憑依した意識という煩悩





かつて
むすばれていたものが
失われてしまったことに
気づきもしなくなったとき

ひとはその失われてしまったものを
それと知らず手段さえ問わずに
激しく求めてやまなくなる

その激しさが世界をむしろ
傷つけてしまうこともあるのだが

かつて
記されていた深遠な秘文字を
読むことができなくなり
その文字の存在さえ
忘れてしまったとき

ひとはその忘れてしまったものを求め
すでに生命を失った形だけの文字で
世界を記述しようとするようになる

その冷たさが世界をむしろ
分裂させてしまうことも知らずに

